

ドリンク需要向け超多収性の晩生品種候補 「95-7-35」

[研究のねらい]

- ・近年、リーフ茶の消費が低迷する一方、ドリンク茶等の原料となる茶の需要は増加している。
- ・原料茶の生産には低コスト化が不可欠であり、多収性の品種が求められている。
- ・また、輸出向けに有機栽培茶等の需要が増加しており、耐病性の品種が求められている。
- ・当センターでは、主力品種「やぶきた」の2倍の収量性を持ち、耐病性も強いチャ新品種候補「95-7-35」を育成した。

[研究の成果]

○「やぶきた」比2倍の超多収性

- ・「95-7-35」の10a当たり生葉収量は、4年間の平均で、「やぶきた」と比較して一番茶が2.2倍、二番茶が2.6倍、秋冬番茶(秋整枝量)が1.7倍であり、年間合計では2.0倍となる(図1)。

○炭疽病耐性

- ・「95-7-35」は有機栽培で最重要病害となる炭疽病への耐性があり、7年間の平均で、「やぶきた」と比較して炭疽病の発生が抑えられた(図2)。

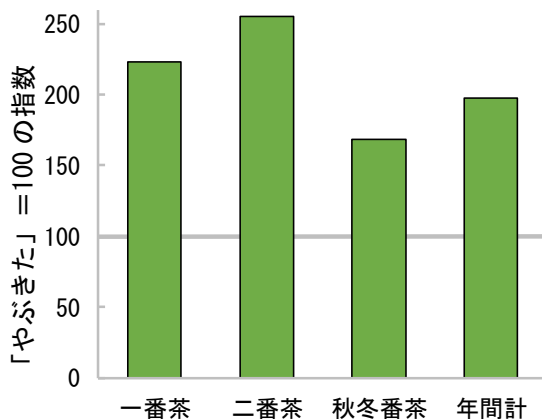


図1 10a 当たり収量
(定植4～7年目平均)

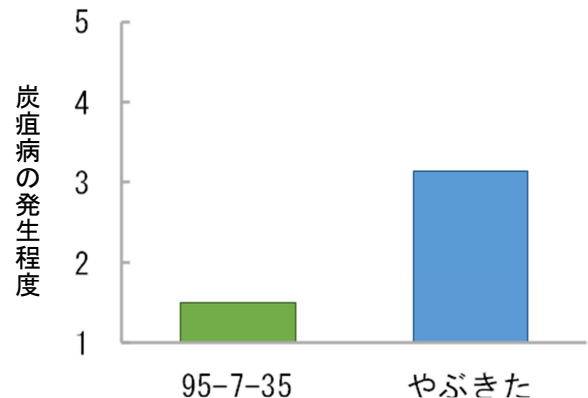


図2 炭疽病発生程度
(定植1～7年目平均、1:無～5:甚多)

○来歴及びその他特性

- ・来歴：種子親♀「ごこう」×花粉親♂「香駿」
- ・早晚性：晩生(一番茶摘採期「やぶきた」比+6日)
- ・樹姿：開張型
- ・樹勢：強
- ・耐寒性：赤枯れ『やや強』
- ・耐病性：炭疽病『強』、赤焼病『中』
- ・耐虫性：クワシロカイガラムシ『中』
- ・収量性：成木『極多』



図3 「95-7-35」の一番茶新芽と水色